国際シンポジウム
「ヨーロッパ啓蒙思想と現代文化　―日本・アジアとの関係から―」

法文学部　教授　藤内 哲也

2024（令和6）年3月24日（日）14時より、本学郡元キャンパス法文学部棟1号館201講義室において、フィレンツェ大学との交流協定に基づく国際シンポジウム「ヨーロッパ啓蒙思想と現代文化――日本・アジアとの関係から――」を開催しました。当日はあいにくの雨模様でしたが、オンラインでの聴講を含め約60名の参加者を得ました。

まず、法文学部の藤内哲也教授（西洋史・イタリア史）より、明治以降の日本を含めた近現代社会の基盤をなす、さまざまな理論や制度を準備した18世紀ヨーロッパの啓蒙思想について、あらためて本シンポジウムで問い直す趣旨が説明されました。

続いて、フランスの思想家モンテスキューを中心とした18世紀ヨーロッパ思想史の専門家であるフィレンツェ大学のローランド・ミヌーティ教授による基調講演が行われました。ミヌーティ教授は、カントの「啓蒙とは何か」を出発点として、多くの研究者の見解を紹介しながら、現代世界の諸問題に対する解決策を見出すために、啓蒙思想の遺産と有効性について考える必要性を強調するとともに、人権や正義、自由、コスモポリタニズムなどの普遍的な価値体系を内包する啓蒙思想の最大の遺産として、当時の思想家たちによる自由で批判的な思考や研究方法を高く評価しました。また、啓蒙思想にはヨーロッパ中心主義的な態度がみられる一方、単なる異国趣味を超えたアジアの文化や宗教、社会に対する真摯な考察がなされ、相互作用が生じていることを指摘し、J・オスターハンメルの言葉を借りてそれを「インクルーシヴなヨーロッパ中心主義」と性格づけました。

このミヌーティ教授の基調講演を受けて、法文学部の太田純貴准教授（メディア論・美学芸術学・美術史）から「知識人」概念の有効性、柴田健志教授（哲学・倫理学）から全体主義と比較して自発的な思考を促す啓蒙主義の意義、丹羽謙治教授（日本近世文学）より日本における「啓蒙」の受容など、それぞれの専門分野や問題関心に沿った多彩な視点からコメントがなされました。

また、会場の参加者からも多くの質問が寄せられ、啓蒙思想の意義や近現代世界における諸問題との関係性、日本におけるヨーロッパ思想の受容等をめぐって、ミヌーティ教授、コメンテイター、質問者の間で刺激的で白熱した議論が展開されました。